東三河農林水産事務所田原農業改良普及課 TEL0531･22･0381

野菜

大玉トマトの裂果対策

鈴木 真理恵

近年、夏場の暑さでトマトの裂果が発生し、問題になっています。裂果発生の要因の１つとして、トマト果実に急激に養水分が流入してしまうことがあげられます。そこで、ペンチでトマトの果梗部分を潰すことで急激な養水分の流入を防ぐ「果梗捻枝」という対策方法があります。昨年度、管内で数名の生産者がほ場の一部で試行しており、効果が確認されています。

１.果梗捻枝による裂果発生の抑制効果

昨年度、農業改良普及課で捻枝の裂果に対する効果を調査しました。その結果「桃太郎ブライト」の第１、２果房において裂果の発生率は１回捻枝することで無処理区8.5%に対して、5.8%（-2.7ポイント）、２回の捻枝で無処理区8.0%に対して2.6%（-5.4ポイント）に低下しました。

また、愛知県農業総合試験場東三河農業研究所では「桃太郎ホープ」の第１～３果房で裂果の発生抑制効果を確認しました。その結果、無処理区の裂果発生率が70.3%だったのに対し、捻枝１回区29.9%（-40.4ポイント）、捻枝２回区9.7%（-60.6ポイント）と、非常に高い裂果低減効果があることがわかりました。

この２つの試験結果から、品種や果実の大きさによって裂果発生の程度は変わりますが、捻枝による裂果発生の抑制効果と、１回の捻枝より、同一箇所を２回捻枝する方が裂果低減効果が高いことが確認されました。

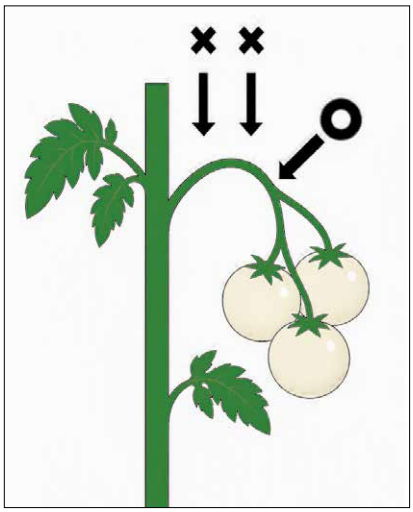
２.果梗捻枝を行う上での注意点

⑴タイミング

果梗捻枝を行う場合、１回目は「白熟期」とよばれる、トマトの果皮が緑色から白っぽい色になるタイミングで捻枝してください。それよりも早いとトマトの肥大が止まってしまい、小玉になります。２回目を行う場合は、１回目と同じ箇所で、２、３日後に行ってください。

⑵位置

なるべく果梗が下垂している箇所で捻枝してください（図１）。果梗部が上に向いている箇所を捻枝してしまうと果梗が折れ曲がった衝撃で落果してしまいます。主枝に近すぎると主枝から果梗が剥がれてしまう可能性があります。果梗部が短い場合は捻枝を控えてください。



▲図１　捻枝推奨箇所



▲写真１　適正な捻枝強度



▲写真２　捻枝が強すぎる例

⑶捻枝強度（写真１,２）

ペンチで捻枝する際、強い力で捻枝すると果梗が必要以上に傷んでしまう場合があります。最初は軽い力で潰し、加減を確認してください。強すぎるとへた枯れしてしまいます。

⑷病気まん延防止

青枯病やかいよう病が疑われる場合は病害のまん延防止のため、捻枝をしないでください。また、捻枝箇所から灰色かび病が発生した事例があります。病原菌の侵入を防ぐため、できるだけ晴れた日に捻枝を行うなど、植物がすぐに乾く条件で行ってください。

捻枝後は果実やへた部の状態を定期的に確認し、異常な変色や枯れ込みが見られた場合は以後の処理方法を見直してください。初めて実施する場合は、一部の果房で試行し、適切な捻枝強度を確認してから全面的に導入することを推奨します。

引用文献　上田ら　８月定植の促成栽培におけるトマトの果梗捻枝処理が裂果率及び収益性に及ぼす影響　愛知県農総試研報57(2025)